

監修 吉川幸次郎

朝日新聞社

新訂 中国古典選

宋詩選

入谷仙介

著者略歴

1933年兵庫県に生まる

京都大学文学部卒業

現在京都大学研修員

著書一「高啓」(岩波書店)

新訂 中国古典選 第18巻

宋 詩 選

定価 650 円

発 行 昭和42年 3 月 1 日 第 1 刷

著 者 入 谷 仙 介

発行者 朝日新聞社 足 田 輝 一

発行所 東京 名古屋 朝 日 新 聞 社
大阪 北九州
印刷 内外印刷 製本 古川製本

© 入谷仙介 1967

装幀 原 弘

解 説

一、宋詩について

宋詩とは何か。それがただ宋という一つの王朝の存続した期間に製作された詩というだけのことならば、とりたてて問題にするにあたらない。それだけのことならば、かの明の中葉以降に、唐詩復興を熱狂的に叫んだ古文辞派の人人が、これまた熱狂的に、宋の詩を邪道の詩として排撃する必要はなかったし、中国や日本の詩人たちが、唐を祖述すべきか、宋を祖述すべきかについて、見解がわかれることもなかったはずである。それらの論争を紹介するのは、当面の目的ではない。ここでは宋詩が、ある場合に強烈な反発を招くだけの重大な意味と内容を、中国の詩史の上で持つ存在であることを指摘すれば足りる。しかるに宋詩は今日の読者には、唐詩にくらべて比較的閑却されている。宋詩を代表する両大家、蘇軾そしき、陸游りくゆうといえども、唐の李白りはく、杜甫とほとはいわぬ、王維かうい、白居易はくきよにくらべてもはるかに少い読者をしか持たぬにちがいない。もとより読者の多少がそのまま文学的価値につながるわけでないが、読者が少いことは、文学作品の場合、やはりその内容と全く無関係とは考えられない。宋詩のこのような性格、一方の極には強い反発、他方の極には広汎な無関心、にもかかわらず重要な意味というのは、どうしてなのだろうか。この疑問を解くために、我々は宋詩の内容について、もう少し検討してみよう。

その前にのべておきたいのは、封建中国の詩を支えていたのは、どういう人人だったかということである。それは主として士族、あるいは士大夫と称せられる、経済的には地主であり、政治的には封建王朝の官僚、もしくはその予備軍である人人である。彼らはまた封建時代の文化的創造と知識とを独占していた。唐代以前、すなわち本選書の「古詩選」であつかった時代には、彼らの上にさらに高級官僚の地位を世襲的に独占していた、大地主である門閥貴族があり、彼らは下級官僚として貴族に奉仕していた。文学の部面でもまたそうであつた。「古詩選」に収めた詩の多くは貴族自身の、あるいは貴族のためのものである。しかし、彼ら士大夫はしだいに勢力をのぼし、隋唐三百年を過渡期として、ついに貴族の勢力を粉碎し、みづから歴史の主人公となつた。貴族と士大夫とのちがいの最大の指標は、官僚の地位を世襲することができず、必ず科挙（高等文官試験）のきびしい門をくぐらねばならぬ点に求められる。つまり唐詩は烈しい貴族とのたたかいの中に、勢力をのぼしつつある士族たちの叫びであり、宋詩は新に勝利した彼らの歌声であつた。

唐詩は一つのカオスである。唐詩の魅力はそこにある。唐詩においては思想と感情とは十分に分化していないままに、渾然と一体になっている。しかもその中に新なる噴出を求めてやまぬ強大なエネルギーが隠されている。だから唐詩はすべてが新鮮であり、純粹であり、常に驚きが用意されている。詩形さえも唐詩においては、かならずしも古体詩、近体詩のそれぞれの詩形の固有の役割を、完全に自覚して使用しているわけでない。要するに唐詩はまず創造であつた。

カオスはいかに貴重であつても、永遠にカオスのままで止まりえない。カオスの内部でどろどろにまざりあい煮えたぎっていたものは、しだいにそれぞれの要素に結晶していかねばならぬ。唐詩から宋詩への展開は必然で

あった。結晶は三つの詩形への分化という形で行われた。古体詩、今体詩、詞である。このうち詞については別に一項目をもうけ、ここでは前二者についてのべる。また、古、今体の詩の形式的なちがいの詳細についても、巻末に附録する。なお以下の文で古詩と称するのは詩形としての古体詩を意味し、唐以前の古詩を意味するのではない。

イ、古 詩

詩の中でもっとも定型の拘束のゆるい、ほとんど自由詩に近い詩形である。宋人ことに北宋人はこの詩形をもっとも愛用した。複雑な思想、内容を盛るのにもっとも適するからである。宋人は議論をもって詩を作ったということがよくいわれる。それは彼らが自己の主張、見解を詩によって発表したからである。この特色は古詩においてよく発揮された。たとえば歐陽修の「水谷を夜行きて子美と聖俞とに寄す」（六二ページ）という詩は、一部叙景詩的な要素をふくむが、主要部分は作者の詩論であり、宋詩美学の宣言ともいべき内容を持つ。また宋詩の最後を飾るともいべき、文天祥の力作「正気之歌」（三四五ページ）は、まれに見る壮大かつ厳肅な人生論である。このような傾向は、かならずしも宋人の独創ではなく、唐代の杜甫、韓愈などにはすでに見られる。しかし大規模に発展させたのは何といっても宋人である。そのゆえに宋人は後代から非難もされた。だがそれによって宋詩は新しい分野を広く開拓することができた。

宋人の古詩の内容をなす思想はさまざまな要素をふくむが、それらをつらぬく一本の太い糸は、ヒューマニズムである。より具体的にいえば、さまざまな意見を持つ詩人たちの、暗黙の統一見解として、いかなる人も、社会の下層に位する農民や、さらには少数民族をさえふくめて、幸福になりうる権利があること、その幸福をさま

たげるものを、人人はとりのぞく責任があり、そのための武器として、詩、ことに古詩は重要であること、などが存在していた。梅堯臣の「汝墳の貧しき女」(四〇ページ)は、貧しい農民の孤児の娘のために、蘇軾の「勸農に和す」(二二一ページ)は漢人にしいたげられる少数民族のために、陸游の「夏の夜に舟の中にて水鳥の声を聞くに甚だ哀しくして姑悪と曰うが若くなれば感じて詩を作る」(二七九ページ)は姑に虐待されるよめのために、それぞれ作られている。内容はちがうけれども、弱者に対する愛情と、それらの不幸のくりかえされることなかれという、作者の願いは一つである。このヒューマニズムもまた杜甫、白居易に代表される唐代詩人のよき遺産なのである。南宋に入ると外国による国土の侵略という事態に即応して、ヒューマニズムは愛国主義という形を取ることが多くなった。陸游の愛国詩はその典型である。

古詩によって議論を展開することが可能なのは、古詩には長さの制限が無く、いくらでも内容を拡げることができるからである。このことは複雑な内容を精密に歌いつくすことができるのを意味する。唐詩においてもすでに古詩のこの特色の追求はなされており、杜甫の「北征」(岩波書店、中国詩人選集卷一〇「杜甫」)、韓愈の「南山」(同上巻二「韓愈」)などのいちじるしい例がある。宋人は議論的な詩以外でも、この特色を大いに発揮した。王安石の「禿山」(一一六ページ)の詩は孤島におけるさるの一族の盛衰史であり、黄庭堅の「磨崖碑の後に書す」(二三七ページ)は、安祿山の乱後の唐の複雑な政治情勢を、宮廷内部と、下級官僚である詩人たちと、両方の面からえがいている。

古詩は近体詩のようなととのった、コントラストのいちじるしいリズムを持たないから、平静でありやすく、感情の言語よりも理性の言語に適する。今までのべたことは実はこのことに集約される。感情の言語は強烈で人

に訴える力が強く、比較的時代を越えた普遍性がある。誰にもわかりやすい。そのかわり間口がわりあいにせまく、単純であるから、早くマンネリズムになりやすい。唐詩は古、今体を通じて、まず感情の言語である。

年年歳歳花相い似たり

歳歳年年人同じからず

(劉希夷^{りゅうきい}「白頭を悲しむ翁に代りて」本選書「唐詩選」上一三四ページ)

春眠曉を覺えず

処処啼鳥を聞く

(孟浩然「春曉」同書、上三三九ページ)

いずれも感情の言語としてはなはだすぐれる。しかし絶対にまねがきかないといってよい。理性の言語はこれと反対の点が多い。時代がかわり状況がかわると、内容そのものがわからなくなったり、あるいはかつて興味を持たれたのがどの点にあったのかわからなくなることが多い。また内容そのものは理解されても、それに対する共感が失われることも多い。平静でありやすいため、人に訴える力も少い傾向がある。だが、作者の思考力、認識力のいかんによって、次々と新しい分野を拓げていたり、あるいは同じことをのべても、作者の観点や人柄によって、ちがったものを打ちだすことができる。前者の例として、本書では適当な詩を収めえなかったが、ふぐ、しらみ、にわとりなどさまざまな物を詩の題材として消化しようとした、梅堯臣の努力があり、本書に収めた詩では楊万里の「小児の戯れに春牛を打つを観る」(三六四ページ)などがあげられる。後者の例としては、欧陽修(七四ページ)と梅堯臣(七五ページ)の二つの「鬼車」^{きしゃ}、陸游と范成大(二七九および二八三ページ)

の二つの「姑惡」の詩の場合がそれである。感情の言語を唐人に開拓されつくした宋人の行く道は、理性の言語に向かうのが自然であった。

そもそも、そうした詩界の内部事情を別にしても、宋という時代は理性の尊重された時代であった。朱熹しゆきによって大成された新儒学は、それまでの古典注釈を主とした儒学にくらべ、はるかにととのった哲学体系を持ち、その名も理学と呼ばれる。あるいは北宋後半の政界を混乱させた新旧兩法党の争いも、のちには単なる派閥争いの様相を呈したが、最初はそれぞれの政治理論にもとづいた対立であった。こうした風潮が詩をすらも理性をも拒否しない言語たらしめたのである。理性は感情に優先せねばならなかった。蘇軾の詩における重要な功績は、その巨視の哲学により、詩から悲哀を遠ざけたことにあるとは、吉川幸次郎博士の指摘（中国詩人選集二集巻一「宋詩概説」一三三ページ）である。しかし蘇軾に先立つ詩人はすでにそこにいたる路を用意しつつあった。宋詩の最初を開いた王禹偁おううしやうがすでにそうである。彼の「陽城駅を見ず」（六ページ）は、片田舎に左遷されたことを歌って、なお悲哀のかげを宿すが、しかし自己の存在を歴史的に位置づけることにより、悲哀を超克しようと努力する。また欧陽修の「鬼車」は、迷信のもたらす恐怖を、理性的な努力により克服する。

理性優先的な態度は、詩においてはまた、形式より内容を優先させることになる。宋詩が時にその粗暴さにより非難されるのはこのためである。欧陽修の「水谷を夜行きて子美と聖俞とに寄す」は、最初は紀行的な叙景詩として出発するが、それは間もなく消えてしまい、友人の詩の批評になり、終りには友人たちの身の上に何かあるらしいことを暗示して、しりきれとんぼのように終わる。三つの内容のあいだに格別の関連も見られず、だらしない構成とさえいえる。しかもこの詩は、宋詩の名作の一つであり、作者の代表作といつてよいのである。宋

人たちは、このような内容と形式の不整合をむしろ自分たちの詩の特色として評価しさえしているようである。古体、近体を通じて、故意に形式を変形させることにより、表現の可能性を追求しようとしたのが、黄庭堅の詩の方法であり、その極はあらたな形式主義にまで陥りさえしたのである（二二二ページ参照）。

ロ、近体詩

古詩についてのべたことの主要な部分は、近体詩にもあてはまる。ただ近体詩はきわめて厳密な形式を持つ短小な詩形であるため、宋人はこれに古詩とは異なる別の役割を認めた。論理に敏感な宋人は、詩形それ自身の持つ固有の論理を、厳密に追求しないではいられなかったのである。

古詩には宋人の思想、あるいは社会人としての側面が強く出ており、自然よりも人事に傾くのに対し、近体詩は宋人の生活、あるいは私人としての側面が、ことに休息の姿勢であらわれる傾きがあり、休息の姿勢の一つのあらわれとして、自然が好んで取りあげられる。それゆえ近体詩は古詩ほどりくつっぽくない。しかし理性が感情に優先するという態度はつらぬかれている。近体詩においてもその態度は平静としてあらわれ、さらには淡泊としてあらわれる。平静とは理性が感情を統御する所に生まれる状態なのであり、平静の客観的な姿が淡泊なのである。

宋詩における平静さは、古詩よりも近体詩に一そうよくあらわれている。古詩は説得的であり叙述的であるために、態度としては平静でありながらも、説得、叙述についてやされるエネルギーが、おのずからにある種の熱情的なふんい気をもたすことが多い。近体詩はその詩形のリズムが唐詩におけるように感情の高揚を盛りうるとともに、厳密にして微妙な言語の均衡を要求されることによって、平静さを表現するにも適する。宋の詩人の

うちで近体詩による平静の方向をもっともよく示すのは、王安石、陸游らであろう。

俯き窺うかがいて緑の淨いときを憐あはしみ

小さく立ちて幽ほのかな香たりに佇たたずむ

幼わきを攜はえて新はしき葯すを尋ね

衰えしを扶たけて野わの航たしに坐ふす

(王安石「歳晚」一三五ページ)

老翁は七十に垂なんんとするも

其の実は童児に似たり

山の果は啼こき呼さびて覓もとめ

郷の讎おにやらいは喜び笑あはいて随たう

(陸游「適たしみを書す」二九〇ページ)

これらの例からも予想されるように、宋代の近体詩は主観的な表現を好まない。状況や行動を客観的にのべる中で、自分の意図をおのずから浮かびあがらせようとする。唐代の近体詩は「三體詩」に示されるように、主観的表現と客観的表現、情と景とあい半ばするのが原則だが、宋代の今体詩には全く主観を表現しない佳作がある。

春の陰は野に垂くもれて草は青青と

時に幽しずけ花有りて一樹明かるし

晩ゆふぐれに孤舟を古ほき祠くらの下に泊ふなすれば

川に満つる風雨に潮の生ずるを見る

（蘇舜欽「淮の中にて晩に犢頭に泊す」九七ページ）

客観的な表現が多くなったことは、観察が鋭敏になったことを意味する。鋭敏な観察は精密な表現をもたらす。客観的な事象のみならず、主観的な人間心理にも、鋭敏な観察は切りこんでいく。

病中は雨を嫌い又た晴を嫌う

是れより情懷は未だ苦だ平かならず

両日雨多きも端に悪しからず

市の声は洗い尽されて只だ簷の声あり

（楊万里「再び病中に懷いを書して仲良に呈す」三六三ページ）

鋭敏な観察は時に機知となり風刺となり皮肉となる。

藜を杖つき飯を裹みて去くこと忽忽し

眼を過ぎるひまに青銭は手を転して空し

贏ちえたるは兒童の語音の好きこと

一年の強半は城中に在り

（蘇軾「山の村」その四、一八一ページ）

南宋に入ると、社会事象の一層の複雑化にともない、近体の尖鋭と古詩の委曲とをあわせて、複雑な全体を鮮明に歌いつくす方法として、たくさん絶句を集めて、大きな連作とする方法が試みられた。これも唐代に王維

の「輞川集」(中国詩人選集卷六「王維」)、杜甫による絶句の連作、ほか二三の例があるが、南宋人によって新しい生命を与えられたといえる。劉子翬の「汴京紀事」二十首(二六一ページ)あたりがそのさきがけであり、范成大の「四時田園雜興」六十首(三一二ページ)がその典型的な作品である。

宋人は古詩に重きを置いたと、先にのべたが、それは主として北宋においてであって、南宋になると様相がやや異なってくる。それは詩を支える人人の状況が変ってきたことと関係があると考えられる。北宋の士大夫は、新に勝利した階級に特有の氣迫に満ちていた。そのあらわれとして、政治と學術と、詩と散文とを一身に兼ねるのが当然とされ、四つの方面で第一人者たることが理想と仰がれた。歐陽修、王安石、蘇軾らはこの理想を達成したといつてよい。彼らほどでなくても、北宋の政治家はおおむね詩文をよくし、しばしば學者であつた。北宋詩人の徹底した理性優先の態度は、自分たちの社會を動かす實力に対する信頼と、それを裏づける広い知識によりはじめて可能なのであつた。そもそも理性の言語を駆使するためには、広い知識が必要なのである。

南宋になると、士大夫階級の中にさらに分化が起つてきた。官僚機構が整備されて、高級官僚と下級官僚との地位が固定化してくると、高級官僚はもはや詩文の技能や學問を重視しなくなる。必要なのは官僚機構をあやつる政治技術だけである。詩文や學問は下級官僚とその予備軍に任しておけばよい。詩など何とか理窟をつけて見たつて、たかがひまつぶしの手段ではないか。人にやらせて自分はそれを鑑賞したらたくさんだ。かくして南宋の詩人は、范成大のごとく大官の地位を得たものもあるが、官僚機構からは疎外された職業詩人が多くなる。陸游にすらその傾きがあり、それゆえに彼は「此の身合に是れ詩人なるべきや未や、細雨に驢に騎りて劍門に入る。」(劍門の道中に微雨に遇う)と不平をもらさないではいられなかつた。こうして詩が娯樂的、消費的なあつ

かいを受けると、内容も変化せずにはいなかった。長ったらしくむつかしい古詩よりも、感覚的に快く、短く気の利いた近体が喜ばれるようになる。

このような変化は、上からの要求であるだけでなく、下からの要求でもあった。南宋になると詩を作り詩を読む人人が急激に増加する。経済の発展にともない、市民の生活に余裕が生じたのがその原因である。彼らは新しい階級として文学を自分たち独自のものに完全に再編成するだけの力を持たなかったが、士大夫の文学的主導権に従いつつも、しだいに文学の実質的な手となっていった。南宋はその第一歩である。自分も本屋の主人である一市民の陳起が「江湖小集」にまとめた詩人の多くはその種の人人であった。これらの人人は、もとより北宋の巨人たちのごとき、十分な教養と深い思想を持たない。彼らが詩に接近するには、理性よりも感性を手がかりにする方がやさしかった。そのためには古詩よりも近体の方がわかりよい。その上、実作にかけても、定形のゆるやかな古詩は、ゆたかな語彙と強大な構成力を持たなければ、かえって作りにくい。近体は形式がめんどろなようでも、与えられた形式を覚えこんで、それに合わせて字をはめこめば、曲りなりにも詩の体裁は整うから、初心者にはむしろ作りやすいのである。こうして上下両方からの要求が近体を優勢にしていた。なお市民の詩の発展が、市民に詩を教授する町の宗匠を生み、詩人の職業化をうながす要素となった。南宋が亡んだのちに、多くの詩人が元に仕えず、抵抗の姿勢を守りえたのは、彼らが市民の支持によって、官僚機構の外で生活する道を持っていたのが、大きい原因の一つとなっている。さらに市民の詩の発展に関連して、北宋の末から詩の抒情性が復活はじめ、南宋の中期以降になると永嘉の四靈（三九五ページ）と呼ばれる四人の詩人に代表される、晩唐風の小さな抒情がもてはやされるようになったことを附言する。

宋詩を唐詩と全く異質のものと考えるのは誤りである。これまで説いたように、唐詩が必然的に宋詩へ展開していったものである。宋の詩人たちは唐詩に対する尊敬を失ったことはない。なかでも杜甫に対する尊敬は圧倒的であった。だが、それだけに偉大な唐詩は彼らにとって重荷であった。唐には無い新しい詩美を発見せねばならぬ宿命をせおう苦渋が、彼らにはあった。その立場は十九世紀の巨大な文学の後を承けた、二十世紀の文学者と似ている。その解決の方向が、より多く文学に知的要素を導入することであった点も、両者に共通する。唐にない新しい詩美の追求は、美的感覚にも影響した。何度も名をあげた歐陽修の「水谷を夜行きて子美と聖俞とに寄す」には、

譬えは妖韶ようしやうの女の如し

老いしも自ら余のこんの態すがた有り

近ごろの詩は尤ことに古硬にして

咀嚼くわくするも嚙かみがたきに苦しむ

初めは橄欖かんらんを食うが如く

眞の味は久しくして愈いよいよ在り

という。これは、直接には梅堯臣の詩風を形容したものであるが、宋詩全体の風格を写して妙である。娘ざかりの美女でなく、世の中の酸いも甘いもかみわけた中年女の色気、あるいは舌に乗せると溶けさるキャラメルのごときでなく、初めは何ともいえぬ変てこな味だが、よくかんでいるうちに滋味が出てきていつまでも口中に残るようなそういう味、それが宋詩のねらい所である。つまり高度に洗練された極に、無技巧の段階に達するのをめざ

すが、宋詩なのである。

唐詩から脱出しようとする宋人の意欲は、作詩態度にも変化をもたらした。詩が日常化したことである。唐代においては作詩することは特別な行為であった。「唐詩選」には旅行や送別の詩ばかりをたくさん収めてあるとよくいわれる。それは「唐詩選」の選択の基準自体が偏向しているせいでもあるが、もともと唐詩はそのような精神的緊張の高揚した場合に作られるものである。だから唐代の詩人の作品はそう多くない。白居易の三千首というのを例外として、李白、杜甫が千首を超えるが、王維、韓愈のような大家でも数百首、はなはだしきにいたっては王之渙おうしかんのようにわずか数首の絶句によって名家とされる例もある。「語の人を驚かさずんば死すとも休やまず」(杜甫「江上にて水の海勢の如きに値あい、聊いささか短く述ぶ」) というのは、そのまま移して唐代詩人のスローガンとなしうる。

宋代になると、作詩は何ら特別の行為では無くなる。宋人は日記をつけ、手紙を書き、随筆をつづるように詩を書いた。陆游の詩にしばしば「適を書す」というのがあり、本書もその一篇を収めたが、こうした特別の製作動機を持たない、折にふれての心の動きをのべた詩が、宋代には数多い。あるいは日常のこまごました見聞、世上の話柄、そうしたことも詩になった。何でもかんでも詩にしてしまうのである。だから宋人の詩の数はたいへん多い。唐詩の全部を集めた全集に、清の聖祖(康熙こうし帝)が編集させた「全唐詩」がある。全五百巻に約四万八千首を収める。大部にはちがいないが、かなり努力をすれば通読できないことはない。宋詩にはそうした形の全集ができていない。今後作られることも、中国か日本かに、東洋の古典文化の保存整理を最重点的な国策とする政府が出現して、金と人手に糸目をつけずに編集させるといふ事態が起こりでもしなければ、まず望めないであ

ろう。また、たとえ完成しても、おそらく個人の精力で通読するのは不可能な分量になるものと思われる。何しろ陸游一人で九千首。千首や二千首の詩人はざらにいる。一人の詩人の詩作が多いだけでなく、詩人の数自体がうんと多い。詩が日常化すると、誰も作れるようになるわけだし、逆にまた教養あり余暇ある人人がふえて、作詩人口が多くなったことが、日常化の要求を強めてもいったのである。

以上、不十分ながら宋詩の内容について説明を試みたが、そろそろ最初の疑問、宋詩はなぜ反発と無関心との対象になったかという問題に立ちかえてみよう。宋詩は一口に言って選良（エリート）の詩である。唐詩は人間のなまの感情を、卒直に歌おうとする。宋詩は感情を理性によって修正し、醇化（じゅんか）しようとする。唐詩はダイナミックであるのに、宋詩は平靜である。唐詩は華麗であり、宋詩は淡泊である。唐詩は感性的に受容する詩であり、宋詩は知的に玩味する詩である。吉川幸次郎博士の比喻を借りれば、唐詩は酒であり、宋詩は茶である。宋詩は作るためにも味うためにも、高度の理性と教養とを前提とする。広範囲の読者を得るためには、これは不利な条件である。十分な教養を持たぬ人人がしりごみするのも無理はない。ここで想起する必要があるのは、古文辞派の人人の役割である。吉川博士の研究によると、古文辞派の「詩は盛唐」という主張は、明代に入っていよいよ増大した市民の詩に対する要求に、大胆に答えるために、過激な擬唐主義を唱えたものだという（元明詩概説第六章）。つまり十分な教養を積むいとまのない人人に、一ばん手とりばやく手軽に詩を勉強させる手段なのであった。盛唐の詩は、一ばん多くの人人に普遍的に理解される詩だからである。そうなると宋詩のような教養人の詩は、むしろじゃまものである。そんな頭でこねあげたような詩は詩ではない、読んではいかんといっておけば、市民大衆は知識におびやかされずに安心して詩を作れる。こうして宋詩は一度は忘れられようとした。